

平成 30 年度第 1 回横浜市創造界隈形成推進委員会 議事録	
日 時	平成 30 年 7 月 11 日 (水) 10:30~12:00
開催場所	YCC ヨコハマ創造都市センター 3 階スペース
出席者 (敬称略)	<p>■委員</p> <p>野原卓 (横浜国立大学大学院 准教授) <委員長> 六川勝仁 (馬車道商店街協同組合 理事長) <副委員長> 遠藤新 (工学院大学建築学部 教授) 岡本純子 (公益財団法人セゾン文化財団 プログラム・オフィサー) 菅野幸子 (アートプランナー・リサーチャー) 重松久恵 (ブランド・マネジメント・コンサルタント) 日沼禎子 (女子美術大学芸術学部 教授)</p> <p>■オブザーバー</p> <p>恵良隆二 (公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 専務理事)</p> <p>■事務局 (説明者等)</p> <p>清水克彦 (文化芸術創造都市推進部長) 小泉宏 (創造都市推進課長) 工藤裕二 (創造都市推進課担当課長) 河本一満 (創造都市推進課創造まちづくり担当課長) 神部浩 (文化プログラム推進部長) 松元公良 (文化プログラム推進課長) 梶原敦 (文化プログラム推進課トリエンナーレ担当課長) 高田聡 (創造都市推進課担当係長) 田中裕記 (創造都市推進課担当係長) 平原雄 (創造都市推進課担当係長) 安藤亜矢 (創造都市推進課創造まちづくり担当係長) 安藤準也 (創造都市推進課創造まちづくり担当係長) 赤崎由香 (文化プログラム推進課トリエンナーレ担当係長)</p>
欠席者	山口真樹子 (国際交流基金アジアセンター 舞台芸術コーディネーター) 簗谷則美 (株式会社ミノヤアソシエイツ 代表取締役)
開催形態	議題 1、2 公開 (傍聴者 0 名) / 議題 3 非公開
議 題	1 平成 29 年度事業評価について 2 次期中期計画素案について 3 YCC 天井脱落対策工事について その他
決定事項	
	小泉課長 【開会】 小泉課長 【事務局紹介】 <人事異動があったため、事務局の紹介を行った。>

議 題 1	小泉課長	【配布資料の確認】
	小泉課長	【定足数の確認】 ○委員 9 名中 7 名の出席があり、委員会設置要綱第 7 条第 3 項により委員会の成立となる。
	小泉課長	【本会議・議事録の公開・非公開の決定】 ○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第 31 条により原則公開となるが、議題 3 及びその他については、第 7 条第 2 項第 5 号の規定に該当するため非公開とする。
		1 平成 29 年度事業評価について
	野原委員長	○それでは議題 1、平成 29 年度事業評価について事務局からの説明をお願いしたい。
	田中係長	<平成 29 年度事業評価について、事務局からの説明及び各分科会の議長から補足説明を行い、議題について審議が行われた。>
		[補足説明]
	野原委員長	○ありがとうございました。それぞれの分科会議長から補足などあればお願いしたい。
	日沼委員	○初黄・日ノ出文化芸術拠点について、昨年度、国際交流基金の地球市民賞を受賞したことも後押しになって場所の価値が高まりつつある。加えて京急高架下において民間事業が進んでいることも評価が高まっている。毎回課題として挙がるのは A I R ではどのような評価を作れるか、例えば出口の戦略が挙げられるが、経済やまちづくりの成長戦略になぞらえらるかなかなかうまくいかない。例えばプロモーション戦略が必要であれば、専任スタッフも必要になってくるので運営にも大きく関わってくる。客観的にみると、レジデンスプログラムの成長戦略は文化芸術の業界全体の課題である。地域密着も含め、国際的、国内での横の連携を図りながら、他の事業者と課題共有を行い業界全体でアーティストの成長に繋げていけるか話し合いの場が設けられることが重要になる。
	六川副委員長	○Y C C について、カフェ事業は施設がメディアへ取り上げられることが多く好調である。貸し館事業が好調であるほど、一方で市民への開放が少なくなるという痛し痒しの部分もある。課題にある、N P O 基準に応じた財務書類の作成については、横浜市からもアドバイスが受けられる体制が設けられるといいといった委員からの意見もあった。また地元である馬車道商店街との連携も上手くいっていることも評価している。
菅野委員	○象の鼻テラスについて、当拠点は何かの特化している他の拠点と違い、い	

	<p>かに市民に開かれているか、そして文化的なイベントの質の両方を考えなければならぬ。すなわち無料休憩所に加え、文化観光拠点であることから質をどう確保するかの両立が難しい。その条件で運営団体はイベントを数多く企画して頑張っているという評価である。これまで文化交流というテーマを持って運営していたが、次期運営団体選考の時期にもさしかかり、次のステップをどう考えるか。その中で運営団体はフューチャースケーププロジェクトを実施し、施設の老朽化や収容人数の問題に市民や専門家を巻き込んだ事業を進めている。このような企画は重要で、分科会でも引き続き経過を注視していきたい。また課題として、利用者側の声が聞けていないことから、アンケート調査を実施して数値の評価を出せないかと考えている。開港の歴史については市民ガイドボランティアを活用しているが、もっと深められるといい。また海外との交流事業を実施しているが、各拠点とその地域だけに蓄積されているので、他拠点と連携し豊かなネットワークを構築できないかという意見が出た。</p> <p>岡本委員 <分科会議長である山口委員が欠席のため代理で補足説明を行った。></p> <p>○急な坂スタジオについて、第一の目的である稽古場については非常に順調に運営がなされている。次世代育成についても複数のプログラムを積極的に実施している。それから「横浜発」の事業としては、国際交流で、TPAMの上演会場になり、海外の方にも当施設へ来ていただくことができたのは良い機会であった。稽古場の利用料金について、収益という面で公立劇場主催公演の稽古の場合は利用料金を高めに設定することも考えられる。また横浜市が取り組むべき課題である広報では創造都市全体でリレーレクチャーを実施しているようなので、その反響について後ほど詳しい内容をお聞きしたい。急な坂スタジオはいずれの事業でも成果を上げているが、人員的に限られた体制である印象は受けている。今年度からはカフェ運営も始めているが、無理のない運営が望まれる。</p> <p>野原委員長 ○THE BAYS について、1年目の推進ということで、CREATIVE SPORTS LAB という2階でインキュベートする活動を1階で販路に繋げることや、地下1階では、ACTIVE STYLE CLUB という市民向けのスポーツやヨガの活動が展開され、初年度としては様々な活動が実施されていることは評価できる。他拠点と同様に、インキュベートしたアーティスト・クリエイターが産業的活動をどうアウトプットしていくのか出口の戦略が課題となっている。また建物の性質上、1階に開口部が少ないためアクセシビリティが活動に向いていないことから、アクセスの改善と中庭の活用、オープンカフェの活性化が求められるが、実際に上手く活用できていないので稼働率が上がってこない。横浜市は関係部局と連携する中で、魅力的に活用できることで活動の発信、地域全体の魅力向上に繋がる。2階の CREATIVE SPORTS LAB は会員制であるが、会員数が増加しないことも課題である。良い事業を行っていても、それがなかなか見えてこないのも、例えば1階と連動する動きなどの見える化をしていく工夫も必要になってくる。</p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>恵良氏</p>	<p><分科会議長である簗谷委員が欠席のため代理で補足説明を行った。></p> <p>○BankART Studio NYK について、全体の活動が終了することもあり総括を行った。特徴的なのはA I Rから韓国との国際交流でいくつかの財団との協定が結ばれたことである。また全体的にはこれまでの活動の成果の見える化は今後非常に重要である。当拠点の価値をしっかりと伝えていく必要がある。古い情報であっても最初に触れる情報は新しいので、そのあたり意識して伝えていけるようにしておきたい。横浜市が取り組むべき事項で財団との関係性について、創造都市における活動、拠点活動以外の集積するアーティスト・クリエイターとのネットワークでは財団は役割を果たしている。また財団の広報では、HPに創造都市横浜というサイトがある。ここでは人に焦点を当て、創造界限拠点に関わる方が多くインタビューを受けており、それを上手に活用していくことも情報発信として考えられる。当拠点では広報活動が課題であったが、広報は単独でも難しく、横浜市にとっても人材・人力的に難しい課題であった。総括すると10年間の活動を終えて、最終的な決算収支も合せることができ、カフェ事業は課題を残したが、これまでの成果について必要となった際に引き出せるよう準備しておくことが活動の成果を次に繋げる道である。</p>
	<p>野原委員長</p>	<p>[質疑]</p> <p>○ありがとうございます。ここまでの各分科会議長の補足説明を含めて質問や意見はあるか。</p>
	<p>遠藤委員</p>	<p>○例えばBankART Studio NYKであれば、これまでの活動の成果をきちんとストックして発信できるようにしておきたい。また黄金町であればエリアの価値が高まってきたことが民間の投資を呼び寄せる結果を生み出した。一方でこれまでの様々な活動が整理されストックされていない。もっとこれまでの成果をストックとして情報発信できれば、さらにエリアの価値を高めることに繋がるのではないかという議論が黄金町の分科会でも行われた。BankART Studio NYKのように他拠点でも共通する部分がある。</p>
	<p>清水部長</p>	<p>○情報発信は、市民や利用者にも周知していただくことが必要である。現在はスマホなど情報取得が容易な時代なので、そのような情報発信ツールに対応することは必要になると考えている。各拠点は創造都市というひとつのテーマで活動しているので、ある程度情報を集約して発信できることが理想である。その中から各拠点を知ってもらえるように、横浜市としても財団と連携など行っていくことが、直近の課題であると認識している。できる部分から動いていきたい。</p>
	<p>野原委員長</p>	<p>○開催する予定のイベントでは連携して情報発信しているが、これまでの成果のストックそのものの全体的な評価をどのように発信してくかが重要である。各拠点は、「創造界限」拠点であるので、まさに、エリアの創造界限作りにどのように貢献しているか、エリアの価値を高めること、さらに拠点の価値を高めることをどのように連動させているか。各拠点そのよ</p>

		うな形でお互いを高めていく発信や手法が求められているのではないか。
小泉課長	○拠点単体のイベントだけではなく、昨年度から Creative Waterway を実施し、初めて拠点間の連携が行われた。今年度も同様の事業の実施が予定されており、そのような事業をフックとしたPRも考えられる。	
工藤課長	○今年度は横浜創造都市を巡るリレーレクチャーと題し、年間で十数回予定している。すでに黄金町のディレクターである山野氏を皮切りに3回実施されている。各回盛況な状況で、内容については並行しながら事務局でまとめ、今後の創造界限拠点運営の参考になればと考えている。	
菅野委員	○拠点間の連携については、各拠点の情報共有が必要という認識なので、このような企画は重要であるが、それ以外に各拠点のディレクターが定期的に集まって話し合う場は設けているのか。	
河本課長	○不定期ではあるが、ディレクターズミーティングというディレクターが集まって話し合う場は設けている。リレーレクチャーについてもディレクターズミーティングを踏まえて企画が立ち上がっている。Creative Waterway 以降、連携が行える環境が整ってきている。	
野原委員長	○クローズドで構わないので、現場の内情も含めた情報を出し合うミーティングがあるといい。ぜひ検討していただきたい。	
六川副委員長	○リレーレクチャーでは、個別とさらにまとめのレクチャーがあってもいいのではないか。創造界限ではグランドデザインを描いていくことも重要だと思う。	
清水部長	○横浜市としては、リレーレクチャー全体を総括した報告書を作成する予定である。	
岡本委員	○全体を総括した報告書は紙媒体での出力となるのか。	
平原係長	○リレーレクチャー全体の総括については、本としての出版を検討している。またグランドデザインについても、そのようなお話ができる方に講師を依頼するなど、事務局である BankART1929 とも相談し総括的な企画を検討していきたい。	
岡本委員	○本としての出版以外にWEB媒体でもいくつかの項目を出力できるといい。	
平原係長	○そのようなWEB媒体についてもこれから検討していきたい。	
重松委員	○情報発信について、文化プログラム推進課のHPがあるが、その情報はどのように吸い上げ、どのように発信されているのか。各拠点の情報提供を発信すべきではないのか。各拠点とのこれまでの情報発信のやり取りの手法を教えていただきたい。	
神部部長	○現在の文化プログラム推進課のHPは、国が実施している beyond2020 プログラムの情報発信のサイトになっており、beyond2020 プログラムを盛り上げようとしている文化庁の動きに横浜市も合せている。文化プログラム推進課のHP以外にも今後は創造都市横浜のHPからも情報を吸い上げられるよう検討していきたい。	
小泉課長	○文化観光局HPからタブで創造都市推進課のHPがあり、記者発表などの	

<p>議題 2</p>	<p>野原委員長</p>	<p>情報はそこに掲載されている。またリンクで財団の創造都市横浜のHPもあり、そこではイベント情報も記載されている。</p>
	<p>重松委員</p>	<p>○例えば横割りプロジェクトが縦割りプロジェクトになってしまっているともったいない。ポータルに創造都市の情報がすべて入っていれば、興味のある情報以外の創造都市の情報も閲覧することができる。そのあたり情報を提供する側も把握して、情報が相互乗り入れできるように整理しておきたい。</p>
	<p>清水部長</p>	<p>○市民が興味を引くような情報が閲覧できるといい。拠点が望んでいるのは集客や界隈性の向上であるにも関わらず、文化観光局の創造都市推進課のHPでは事業者募集など事務的な情報が多い。創造都市拠点にとって有益で、誰に向けて情報を発信しているのかを分かりやすく提供できるようにしていただきたい。</p>
	<p>菅野委員</p>	<p>○当方のHPは自分たちの事業がメインとなっている。創造都市に関するHPは、いくつかあるので、そのあたりのHPを整理することに取り組んでいきたい。</p>
	<p>野原委員長</p>	<p>○横浜市の世界サイトについてアプローチの手法をどのように考えるか。広報という部分ではSNSへの情報提供が課題であるが、コンテンツ的には優秀で、例えばAIRの報告はきちんと設計されている。このような情報にたどり着くまでの情報が見えにくいので、アプローチ方法を検討していただきたい。</p>
	<p>野原委員長</p>	<p>○BankART Studio NYKについては他拠点と違い、総合的に評価し、総括を行い発信していただきたい。BankART Studio NYKは創造都市政策を始めた時期の実験的事業であった背景もあったと思うので、生まれた内容、事実を整理し、詳細に成果として伝えることが必要である。また、創造都市政策は、歴史的建造物の活用も目標に掲げていたが、今回、この点については必ずしも推進できていないことなど、できたこと、できなかったことを評価し、次の事業にどのように受け継いでいくのか、あるいは発展させていくのかを検討することに意味があるので、きちんと検証していただきたい。ぜひBankART Studio NYKで得た価値を継承していただきたい。もう一つはここまでの意見で挙げられた、出口の成果、空間活用のあり方、拠点間の連携、情報発信などこれらは一拠点では解決できない課題である。横浜市の政策が問われる内容も出てきていると思われるので、次回以降の委員会ではどのように乗り越えていくか議論できるといい。</p> <p>○ありがとうございました。質問意見が以上であれば、この議案については了承としたい。</p>
<p>野原委員長</p>	<p>2 次期中期計画素案について</p> <p>○それでは議題2、次期中期計画素案について事務局からの説明をお願いしたい。</p>	

田中係長	<p><中期計画素案について、事務局からの説明を行い、議題について審議が行われた。></p> <p>[質疑]</p>
野原委員長	○ありがとうございました。ここまでの説明を受けて質問や意見はあるか。
岡本委員	○資料2にある文化芸術創造都市施策の浸透度について、4.クリエイティブ・インクルージョンにある⑦の数値が低い、対応する主な施策でヨコハマ・パラトリエンナーレがあるが、このようなイベントを実施するだけでは数値は上がってこない。まずはアクセシビリティの保証が重要ではないか。それについてはぜひ検討していただきたい。
小泉課長	○4.クリエイティブ・インクルージョンにある⑦では、市民の方がどう思っているのかについて質問している。またヨコハマ・パラトリエンナーレの中でアクセシビリティをどうするかを記載はないが検討している。
河本課長	○ヨコハマ・パラトリエンナーレでは、アクセシビリティや寄り添う支援機能が社会の仕組みと一人一人の心に醸成されなければ、なかなか共生社会に向かっていかないと考えている。イベントとはいえ、環境整備については合せて実施することを目論んでいる。またハード整備についても国が文化施設のアクセシビリティを上げることを義務付ける法律ができていることから、今後は基本計画を作っていかなければならないこともあるので、ソフト・ハードの面で取り組んでいきたいと考えている。
野原委員長	○素案に記載がある指標については、ここでの意見をjて反映されるのか。
小泉課長	○基本的には幅広く横浜市全体の計画なので、この場では素案としてどのように進捗しているかの報告である。ここでの意見は個別の事業などで活用していきたい。
野原委員長	○文化芸術創造都市施策の浸透度の文言の内容についてはここで議論する余地はあるのか。
小泉課長	○基本的には中期計画ではこの指標内容でいきたいと考えている。
遠藤委員	○指標を4.0に上げるための見通しや戦略は持っているのか。例えばいくつかある戦略の中でどの内容を当委員会で議論していきけるのか。そのあたり教えていただきたい。
小泉課長	○局内の議論として、特に数値の低い箇所を伸ばしていこうとなっている。具体的には4.クリエイティブ・インクルージョン及び5.クリエイティブチルドレンが低いことから、分析を行って力を入れていきたいと考えている。
野原委員長	○例えば、4.クリエイティブ・インクルージョンにある⑦の数値が低いので、バリアフリー向上について当委員会で議論することになるのか。数値を上げるために頑張った結果と指標内容がリンクしていなければ、相違が生まれてきてしまう。
小泉課長	○そのような意見を踏まえると、当委員会で議論の中心になってくるのは、1.創造性を生かしたまちづくりとなってくる。

野原委員長	○例えば指標⑦については文言を工夫すれば、当委員会で議論できる内容になるのではないかと思われる。頑張った成果が指標の文言にズレがあることで評価に反映されないとなるともったいない印象である。
小泉課長	○4. クリエイティブ・インクルージョンについては⑦がハード整備、⑧がソフトと分けている意味合いがある。ソフト系の⑧でいかに成果を反映させていくかという考え方である。
河本課長	○文化芸術創造都市施策の浸透度というタイトルなので、すべて創造都市に帰結する意味ではなく、例えば指標⑤はダンス音楽など記載があり、横浜音祭りや Dance Dance Dance@YOKOHAMA を意識したような指標になっている。また指標⑦については文化振興課が施設を多く持っており、その中でハード整備の改良や利用しやすい工夫があるかどうかとなっている。指標については文化芸術全般で組み立てている中で当課が関わっていることをご理解いただきたい。
菅野委員	○ここまでの議論は当委員会の立ち位置と非常に関係しており、創造都市政策は横浜市全体の施策に関わっている。当委員会が主に関わるのは②や⑤が中心となるであろうが、全体を見通し理解したうえで初めて意見ができると思うので他の政策との関わりを意識していきたい。従って事務局からは全体で何が起きているかについても説明があると理解しやすい。また各拠点でのハードとソフトの部分で、ハードはバリアフリー対策については意識して実施しなければならない。またソフトでは文化イベントの作り方の意識になるが、イギリスではダイバーシティ（多様性）という言葉で、高齢者や LGBT、障がい者など多様な人々が一緒に社会を作っていくという意味で共生社会という言葉がある。つまり創造界隈の施策の中で意識しなければならないのは、多様な市民に対してのアクセシビリティの保障と多様な方々をいかに取り入れることによって市民に開かれた施設にしていくか。このような解釈で取り入れられると思われるので、それを踏まえ計画などで考えていけるといい。
遠藤委員	○文化芸術創造都市施策の浸透度にある①から⑩までの指標と各拠点にある事業評価軸は、今のところ明確な関係性が見えないので、この指標を各拠点事業者にどのように理解していただき、事業計画の中に反映させるのかを検討する必要があると思われる。
小泉課長	○中期計画は秋にかけて議会を通して可決となる予定となっている。事業者の方々には当計画が確定後、直接的に事業評価軸に関わることはないが、この指標を念頭に置いていただいて、また毎年調査を実施していくので、市民が文化芸術都市についてどのように感じているかの参考にさせていただきたい。
野原委員長	○この指標は結果がどうであったかを質問しているシビアなものである。指標の中にはとにかく大都市の数値が上がりやすい内容が指標に含まれている。つまり施策がどうであったかというよりも都心部であれば数値が上がるであろう内容がいくつかあるので、せっかく実施している魅力的な取組

議 題 3	清水部長	<p>の実験結果が正確に分からないのはもったいないと思われる。実験的な取組が浸透度として市民に伝わっているのかを分かるようにしていけるといい。例えば創造界限は歴史的建造物を扱う事業以外にも多く事業を行っている中で、創造界限の事業が良かった、悪かったというような単純な設問では結果が分からないので、そのあたり具体的内容と浸透度がリンクするほうが良い指標もあると思われる。全体で考える際に、各指標の内容と全体を4.0にするという目標が整合されているのか、創造都市を高めるうえで、評価と施策がつながり相応しい目標であるかどうか、そのあたりが見えてくるといい。</p> <p>○文化芸術創造都市施策の浸透度については今回から試みた内容で、印象を内面的に質問するような内容にしているが、他都市も浸透度を市民にどのように質問するかを悩んでいるようである。新たな中期計画ではこの指標を進めていくが、これで終わりではなく次のステップでは色々と改善をしていかなければならないと考えている。これで確定ではなく、いただいた意見については今後に向けて反映させていきたい。</p>
	野原委員長	<p>○ありがとうございます。質問意見が以上であれば、この議案については了承としたい。</p>
	事務局	<p>3 YCC天井脱落対策工事について</p> <p><YCC天井脱落対策工事について、事務局からの説明を行い、議題について審議が行われた。></p> <p>4 その他</p> <p>[連絡事項]</p> <p><本日の委員会議事録の確認依頼及び今後のスケジュールについて事務局より説明が行われた。></p> <p style="text-align: right;">以上</p>
資 料	<p>1 次第</p> <p>2 席次</p> <p>3 委員会委員名簿</p> <p>4 前回委員会議事録（平成29年度3月26日開催分）</p> <p>5 平成29年度事業評価（資料1）</p> <p>6 次期中期計画素案について（資料2）</p> <p>7 YCC天井脱落対策工事について（資料3）</p>	
特記事項	<p>本日の議事録については、後日各委員に送付し、確認して頂く。</p>	